様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２３２００５１

研究課題名（和文）「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―

研究課題名（英文）'The GenpeiJosuiki as a Cultural Phenomenon':Synthesizing Research from Literature and Performing Arts, Visual Arts, Philology, and History

研究代表者
松尾　葦江（Matsuo, Ashie）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：７０１５７２５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,200,000円、（間接経費）　3,960,000円

研究成果の概要（和文）：非公開のものも含め軍記物語関連の史料・伝本・絵画資料などの調査を、４年間に３６回行った。これまで個別に調査されていた資料相互の比較対照によって判明したことも多い。それらの成果は公開研究会・シンポジウム・講演会での議論を加えて、HPや冊子体の報告書などで発信してきた。また情報量の多いテキストである源平盛衰記の内容を、把握しやすい年表の形式に再編成し、平成２６年度中に公刊する予定で作業を進めている。

研究成果の概要（英文）：Over the course of the four years, we conducted thirty-six rounds of research on historical sources, manuscript texts, and visual materials, including those which are not in the public domain. The research, focusing on comparison and contrast of various sources, yielded valuable insights as many of those sources had previously been studied only individually. We disseminated these findings through workshops, symposiums, and lecture events; in addition, these analyses have been published both on the web and as printed booklets. We will reorganize the voluminous text of The GenpeiJosuiki in an easy-to-understand chronological style, and publish it by the end of the fiscal year 2014 [March 2015].

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：源平盛衰記　絵巻・奈良絵本　中世芸能　中世語彙　治承寿永の内乱　平家物語　年表

１．研究開始当初の背景

源平盛衰記は、『平家物語』諸本の中でも最も記事の分量が多く、しかも後世に与えた影響の大きい一本である。即ち源平盛衰記は、流布本『平家物語』と並んで、あるいはそれ以上に、現代にいたるまで日本人の「源平」時代に関する概念形成の基となってきた。しかし『平家物語』研究において延慶本古態説が通説化している現在、この本の成立、他の諸本との関係や文芸的特性についての研究は進んでおらず、研究者が各自の課題につごうのいい面をとりあげて部分的な議論を展開する状態が続いてきた。元来源平盛衰記は、そのようなやり方では全貌をとらえることができず、中世から近世にかけてのさまざまな文化の生成、変容、継承などの諸問題を解明する手がかりがぎっしり詰まっており、この作品を窓口として、物語や芸能及び絵画などの交流が生み出した、中世から近世に向かう文化の変容過程をうかがい見ることができる。そのような展望の中で初めて、源平盛衰記それ自身も総合的に把捉され、『平家物語』の諸本論を文学史的に語ることが可能になると思われる。

２．研究の目的

文学史・文化史の中に源平盛衰記及び『平家物語』を位置づけることをつねに意識しながら、（１）諸本・伝本の実態調査及び源平盛衰記の成立過程の研究　（２）室町文芸（文学と芸能を含む）及び近世の芸能と源平盛衰記の関係の研究　（３）源平内乱を題材にした絵画資料の調査研究　（４）源平内乱時代の歴史的研究　（５）源平盛衰記の語彙や表記の研究を行い、源平盛衰記それ自体の解明と共に、この作品の成立・変貌・影響につれて日本文化に何がもたらされたかを考察、議論する。

３．研究の方法

下記の５つのテーマを取り上げる分科会を作って、それぞれに調査・研究を進め、報告を重ねた。

（１）『平家物語』諸本の一つとしての源平盛衰記の研究（成立について、文芸的特性について、室町期から近世への変容、近世の版本のあり方についてなど）

（２）室町文芸と『平家物語』諸本との交流の研究（『平家物語』の享受・影響としてではなく、室町文芸との相互交流による作品形成の過程について）

（３）源平盛衰記や『平家物語』を題材にした奈良絵本や絵巻などの調査研究

（４）歴史的な環境と文芸との関係についての研究

（５）中世語彙の出典として源平盛衰記の本文をどう利用できるかについての研究

具体的な作業としては、厖大な源平盛衰記の内容が見渡せるように、記事年表作成を試行し、（５）では語彙検索を可能にするため本文のデータ入力を行った。（１）については成立と初期形態に関して長門切の調査研究、本文の流布と変容に関して近世の版本調査を進めた。（２）では芸能を専門とするゲスト講師を招いてシンポジウムや講演会を公開で開催、時代やジャンルの異なる研究者とも討議を重ねた。（３）については軍記物語を題材とする奈良絵本・絵巻・扇面絵・屏風など多様な形式の絵画資料を調査し、そこに共通するもの、個別に問題とすべきもの、また本文との関係などを考察し議論した。（４）は源平内乱時代を専門とする歴史学者による問題提起を受け止めて討議を行った。

４．研究成果

これまでの源平盛衰記をはじめとする『平家物語』と中世芸能における研究は、世阿弥作の能にいかに『平家物語』が取り入れられたかという、いわゆる本説の問題が中心であった。また、作品研究の場合も、各作品に関係する部分的考察に終わり、トータルな影響関係については論究されてこなかった。（２）の分科会では、このような閉塞的な状態を打開すべく、源平盛衰記の内包する説話世界がいかに能などの諸芸能に摂取され展開していったかを、源平盛衰記の享受史をも視野に入れながら考察した。能楽研究の立場からは、これまでの一方的な本説関係にとどまらず、相互交流（源平盛衰記の本文形成への関与）の可能性についても考察を加え、また古浄瑠璃・浄瑠璃などの近世語り物文芸への影響関係をも追究した。浄瑠璃作者は単に荒唐無稽な創作を行っていたわけではなく、近世の観客たちの源平合戦に関する理解との距離を測りながら創作を進めていたはずであり、源平盛衰記は、浄瑠璃作者・観客双方における源平合戦に関する理解に、多大な影響を与えていたと思われる。

室町時代には、源平盛衰記、またその影響を受けた能や幸若をもとにした、絵をともなう物語（御伽草子）が少なからず作られた。近世になると、源平盛衰記の写本・版本、さらに美しい彩色入りの奈良絵本も多く作られた。それらの中でも代表的な源平盛衰記の奈良絵本（５０冊、海の見える杜美術館蔵）、源平盛衰記の抄出絵巻（１２巻、個人蔵）、画帖に貼り込まれた源平盛衰記の奈良絵（２帖、仏蘭西国立図書館蔵）などを調査し、版本や他の絵画資料との比較検討を行った。また一枚物の絵画や屏風にも、源平盛衰記をもとにした作品が存在しており、それらの所蔵機関に赴き、デジタル情報を収集して比較考察した。その調査によって初めて所在や典拠を明らかにし得た資料も少なくない。また源平盛衰記と『平家物語』や他の軍記物語を共に題材とした絵画資料も多く、「源平の物語」が中世近世の人々からどのように認知されていたかを改めて確認できた。（３）の分科会を統括した石川透が多くの知見を提供したが、調査には全員が交替して参加し、絵画

と文芸の関係の研究方法についても議論を交わした。

（４）の歴史学の立場からは、主として以下のような研究課題が取り上げられた。①源平盛衰記における源頼朝流離説話・挙兵説話の独自性の検証　②東国武士団の実態と叙述内容との距離、また方向性の違いについての検討　③源平盛衰記の持つ史実性に対する評価。さらに南北朝・室町期における武家社会・公家社会との比較を通して、④鎌倉幕府滅亡と南北朝動乱を経過した後の時代の人々が抱く、治承・寿永の乱のイメージについての検討や、⑤合戦に対する考え方（たとえば、戦うこと・討ち取ること・死ぬことなどを含めた合戦観）の変化の有無などに関する検討も行われた。以上について、平成２３～２５年にはゲスト講師を招いて公開研究会を開き、報告と討議を重ねた。

資料調査に出向いた回数は３０数回に上り、調査した資料名と調査者は冊子『「文化現象としての源平盛衰記」研究—文芸・絵画・言語・歴史を総合して—第４集』に一覧表にして掲載してある。調査対象は絵画資料と長門切・源平盛衰記の伝本（古活字版・整版本・写本）が主であるが、関連する軍記物語作品や古筆切も含まれている。殊に古活字版と乱版の関係、無刊記整版本の種類、長門切に模写や複数の筆跡があることなどは、従来の研究ではあまり知られていなかった知見をつけ加えたことになる。

開催した公開研究会・講演会・シンポジウムなどは２０回を超え、招聘したゲスト講師は２５名に上る。それらの場における討議を通して我々は、源平盛衰記のみならず周辺作品の裾野の広がり、芸能や他の文学作品との相互交流、さらに中世から近世に至る武士文化の変貌、近世以降の日本人の歴史や政治に関するイメージをはぐくんだものについて、知ることができ、さらに新たな課題を抱えることになった。殊に長門切の存在と『平家物語』成立論との関係、絵画資料の文学側からの研究方法などは、今後、日本文学の研究史を書き換える問題提起に発展し得るものである。

それゆえ膨大で叙述の煩雑な記事を抱え込む源平盛衰記を、多くの人々が読みかつ容易に理解できることが必要と考え、内容を見渡しやすくするよう、記事年表と巻別記事表を併載した『源平盛衰記年表』（三弥井書店刊）を試作して世に問うこととし、基礎稿を作成した。すでに版元から校正紙が出てきており、目下、修訂・校正作業を進めている。またゲスト講師も含めて４０名近くの研究者が、本共同研究に関連するテーマを設けて、各３５枚程度の論文を執筆し、『文化現象としての源平盛衰記』と題した論集を平成２７年に公刊する予定で、すでに版元から執筆要項が配布されている。

なお平成２２－２５年度に行った調査旅行の報告及び公開講演会・研究会・シンポジウムの内容は、平成２６年３月末日まで下記のホームページによってすべて公開してきた（５．主な発表論文等の中の〔学会発表〕計２３件には、この共同研究が開催した公開研究会等における発表は含まれていない。下記のサイトですでに要旨を公開したので、ウェブ上で確認する事ができる）。また各年度に冊子体の報告書を作成し、関心のある研究者や機関に配布した。

http://www2.kokugakuin.ac.jp/komedlit/

中世文学逍遙

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４６件）

①松尾葦江、源平盛衰記と絵画資料—フランス国立図書館蔵『源平盛衰記画帖』をめぐって—、『源平の時代を視る』（二松学舎大学学術叢書　思文閣出版）、査読無、2014、244—261

②高橋典幸、後白河院　暗主の波乱万丈の生涯、『保元・平治の乱と平氏の栄華』（元木泰雄編　清文堂）、査読無、2014、153—178

③岩城賢太郎、渋谷金王八幡宮の金王桜—中世・近世文芸が武蔵国に伝えた源氏再興伝承、『武蔵野文化を学ぶ人のために』（土屋忍編　世界思想社）、査読無、2014、56—82

④小林健二、在外絵入り本研究の意義と展望、『絵が物語る日本—ニューヨーク　スペンサー・コレクションを訪ねて』（人間文化研究機構・国文学研究資料館編　三弥井書店）、査読無、2014、9—22

⑤小林健二、物語絵の方法—スペンサー・コレクション蔵『呉越物語』絵巻をめぐって—、『絵が物語る日本—ニューヨーク　スペンサー・コレクションを訪ねて』（人間文化研究機構・国文学研究資料館編　三弥井書店）、査読無、2014、43—53

⑥平藤幸、新出『平家物語』長門切—紹介と考察、『国文学叢録　論考と資料』（鶴見大学日本文学会編　笠間書院）、査読無、2014、252—287

⑦伊藤慎吾、東京国立博物館所蔵『頼朝軍物語絵巻』翻刻題、『「文化現象としての源平盛衰記」研究—文芸・絵画・言語・歴史を総合して—第４集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2014、27—51

⑧山本岳史、國學院大学所蔵奈良絵本『やしま』解題、『「文化現象としての源平盛衰記」研究—文芸・絵画・言語・歴史を総合して—第４集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2014、52—60

⑨小林健二、屏風絵に描かれた能—香川県立ミュージアム「源平合戦図屏風」をめぐって—、能と狂言、査読無、11 号、2013、3—14

⑩小林健二、絵画化された語り物の世界—「武文図屏風」をめぐって—、『アメリカに渡った物語絵』（人間文化研究機構・国文学

研究資料館編　ぺりかん社）、査読無、2013、194―205
⑪松尾葦江、資料との「距離」感―平家物語の成立流動を論じる前提として―、國學院雑誌、査読無、114-11、2013、292―305
⑫原田敦史、「平家物語」語り本の形成 ―「一二之懸」を中心に―、岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）、査読無、62－1、2013、273―282
⑬坂井孝一、中世前期の文化、『岩波講座 日本歴史』（岩波書店）、査読無、6(中世 1)、2013、273― 310
⑭高橋典幸、鎌倉幕府論、『岩波講座　日本歴史』（岩波書店）、査読無、6（中世 1）、2013、99―128
⑮高橋典幸、鎌倉幕府の成立をめぐって、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要　文化交流研究、査読無、26、2013、27―31
⑯松尾葦江・伊藤悦子、國學院大学図書館蔵『堀川夜討絵巻』の特徴について、國學院大学校史・学術資産研究、査読無、2013、5、97―115
⑰山本岳史、『源平闘諍録』本文考―巻五「南都牒状事」を中心に―、國學院雑誌、査読無、114-11、2013、333―354
⑱山本岳史、國學院大學図書館蔵奈良絵本『平家物語』考、國學院大學校史・学術資産研究、査読無、5、2013、117―142
⑲伊藤慎吾、中世末期公家社会における寺社参詣―山科言継を中心に―、仏教文学、査読有、38、2013、19―29
⑳平藤幸、新出長門切の紹介、『「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第３集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2013、82―87
㉑伊藤慎吾、白百合女子大学所蔵奈良絵本『平家物語』書誌解題、『「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第３集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2013、88―96
㉒山本岳史、永青文庫所蔵奈良絵本『平家物語』解題、『「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第３集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2013、96―101
㉓伊藤慎吾、国会図書館所蔵『平家物語絵巻』翻刻と解題、『「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第３集』（松尾葦江編　非売品）、査読無、2013、112―115
㉔坂井孝一、源頼朝の流人時代に関する考察、創価人間学論集、査読無、5、2012、1―12
㉕石川透、『御曹子島渡』裸島絵二種、奈良絵本・絵巻研究、査読無、10、2012、17―19
㉖岩城賢太郎、幸若舞曲『鎌田』から近世演劇へ―荒事の渋谷金王丸が形成されるまで―、『中世文学と隣接諸学７　中世の芸能と文芸』（小林健二編　竹林舎）、査読無、2012、523―547
㉗小助川元太、『源平盛衰記』における〈通盛最期〉―剛の者としての通盛像造型の方法―、愛媛国文研究、査読無、62、2012、1―13
㉘小助川元太、異本で読む『平家物語』―〈宇治川の先陣〉を読む―、愛媛国文研究、査読無，62、2012、 40―51
㉙小林健二、能の絵画的展開―二つの新出資料から、『中世文学と隣接諸学―芸能と文芸』（竹林舎）、査読無、2012、338―364
㉚吉田永弘、平家物語と日本語史、説林、査読無、60、2012、53―68
㉛松尾葦江、平家物語と絵画資料―國學院大学所蔵資料を中心に―、國學院大学校史・学術資産研究、査読無、2012、4、149―166
㉜伊藤慎吾、異類・変化・擬人化キャラクターの造形―お伽草子の時代から―、日本文学論究、査読有、71、2012、5-21
㉝伊藤慎吾、『勧学院物語』の社会とキャラクター造形―高貴な雀の物語、『鳥獣虫魚の文学史』鳥の巻（鈴木健一編、三弥井書店）、査読無、2012、213-235
㉞坂井孝一、『平家物語』の生成と東国―「重衡・千手譚」を素材として―、『平家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―』（千明守編　ひつじ書房）、査読無、2011、275― 290
㉟松尾葦江、屋島合戦記事の形成、『平家物語の多角的研究―屋代本を拠点として―』（千明守編　ひつじ書房）、査読無、2011、99―121
㊱松尾葦江、源平盛衰記の「時代」、國學院雑誌、査読有、112-6、2011、1―12
㊲石川透、『源平盛衰記絵巻』と『太平記絵巻』、奈良絵本・絵巻研究、査読無、9、2011、16-19
㊳伊海孝充、「やうてう」私注、日本文學誌要、査読無、84、2011、41―48
㊴坂井孝一、「血の叙述」と軍記物語、『中世の軍記物語と歴史叙述』（竹林舎）、査読無、2011、529― 555
㊵山本岳史、『源平盛衰記』宝剣説話考―龍神の登場場面を中心に―、伝承文学研究、査読無、60、2011、125―135
㊶岩城賢太郎、中世・近世芸能が語り伝えた斎藤実盛―謡曲と『源平盛衰記』を経て木曾義仲関連の浄瑠璃作品へ―、『武蔵野大学能楽資料センター紀要』、査読無、22、2011、15―40
㊷原田敦史、『平家物語』語り本の形成―巻六の叙述を中心に―、国語と国文学、査読有、88-6、2011、35―52
㊸高橋典幸、「史料」と軍記物語、『平家物語の多角的研究』（千明守編、ひつじ書房）、査読無、2011、261―274
㊹高橋典幸、肥前の武士と鎌倉幕府、『列島の鎌倉時代』（高橋慎一朗編　高志書院）、査読無、2011、24―49
㊺小林健二、『太平記』を題材とした絵巻・絵本―スペンサー・コレクション蔵『呉越物語』を中心に―、説話文学研究、査読有、46、2011、87―99

⑯伊藤慎吾、お伽草子における物尽し―歌謡との関係を通して―、國學院雑誌、査読有、110-11、2011、151―163

〔学会発表〕（計２３件）
①辻本恭子、『源平盛衰記』の天武天皇関係記事、関西軍記物語研究会第80回例会、2014年4月20日、関西学院大学梅田キャンパス
②VyjayanthiSelinger、 War, Violence, and Narrative in Medieval Japan（日本中世における戦争と物語）、 New Directions in Medieval and Early Japan Studies、 2014年4月4日、
University of Southern California, U.S.A
③VyjayanthiSelinger、 Blood, Death and Pollution in the Heike Monogatar（『平家物語』における血の表象と穢れ観）、 Annual Conference of the Association of Asian Studies（アジア研究学会大会）、 2014年3月29日、 Philadelphia, U.S.A
④岩城賢太郎、中世・近世の演劇が語った『平家物語』の「世界」―平知盛と源義経に注目して―、天津外国語大学日本語学院講演会、2014年3月4日、中国天津外国大学天津市キャンパス名人大講堂
⑤松尾葦江、源平盛衰記と絵画資料―絵巻を中心に―、二松学舎大学東アジア学術総合研究所共同プロジェクト、2014年2月22日、二松学舎大学
⑥小林健二、国文学における物語絵研究の方法―「松風」絵巻・絵本の場合、大和文華館・大阪府立大学主催公開シンポジウム「文学と美術の出会い」、2013年12月14日、大和文華館
⑦小林健二、新出狂言絵画資料の紹介、能楽学会１０月例会、2013年10月25日、法政大学
⑧山本岳史、『剣巻』の挿絵の展開と『太平記』絵入無刊記整版の出版時期をめぐって、中世文学会平成25年度秋季大会、2013年10月20日、ノートルダム清心女子大学
⑨小林健二、物語絵となった能―絵巻・絵本、そして屏風絵、能楽学会、2013年5月13日、法政大学
⑩山本岳史、軍記物語版本挿絵小考、伝承文学研究会第402回東京例会、2012年12月22日、学習院女子大学
⑪石川透、軍記物語の絵本・絵巻、絵入り本国際集会、2012年8月4日、海の見える杜美術館
⑫松尾葦江、源平盛衰記と奈良絵本・絵巻、絵入り本国際集会、2012年8月4日、海の見える杜美術館
⑬小助川元太、異本で読む『平家物語』―「宇治川の先陣」を読む―、愛媛県高等学校教育研究会国語部会・夏季特別教材研究会、2012年8月1日、松山東高等学校
⑭小助川元太、『源平盛衰記』の方法―〈通盛最期〉を中心に―、古典研究会、2012年6月10日、県立広島大学
⑮伊海孝充、儀理能に関する一考察―故事成句の引用に着目して―、能楽学会、2012年5月12日、法政大学
⑯小助川元太、『源平盛衰記』における平家物語の再編―〈俊寛最期〉〈文覚流罪〉を中心に―、愛媛国語国文学会、2011年10月10日、愛媛大学
⑰小林健二、絵画化された語り物の世界―「武文屏風」をめぐって、コロンビア大学国際シンポジウム「日本の視覚文化―芸能・メディア・テクスト―」、2011年9月17日、コロンビア大学ケントホール
⑱ GantaKosukegawa 、 Transformation of *Heike monogatari* 、 13th International Conference of the European Association for Japanese Studies , 24-27 August 2011, Tallinn-Estonia.
⑲伊藤慎吾、江戸時代における『平家物語』パロディ化の展開、EAJS国際会議、2011年8月24-27日、タリン大学（エストニア共和国）
⑳小林健二、Study on Illustrated Books, Using Digital Images（デジタル画像を用いた絵入り本の研究）、EAJS国際研究集会、2011年8月24日、タリン大学
㉑石川透、奈良絵本・絵巻の研究、奈良絵本・絵巻国際会議、2011年2月11日、ニューカッスル大学
㉒小林健二、『太平記』を題材とした絵巻・絵本―スペンサーコレクション蔵『呉越物語』を中心に―、説話文学会、2010年10月10日、学習院女子大学
㉓小林健二、「舞の本絵巻」研究における諸問題、　奈良絵本・絵巻国際会議、2010年8月22日、聖徳大学

〔図書〕（計１３件）
①松尾葦江編、非売品、「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第４集、2014、96
②伊海孝充、檜書店、切合能の研究、2013、442
③松尾葦江編、非売品、「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第３集、2013、212
④高橋典幸（責任編集）、朝日新聞出版、対モンゴル戦争は何を変えたか（週刊朝日百科新発見！日本の歴史20　鎌倉3）、2013、38
⑤石川透、竹林舎、中世の物語と絵画、2013、502
⑥石川透、三弥井書店、源平盛衰記絵本をよむ、2013、235
⑦VyjayanthiSelinger、 Brill、Authorizing the Shogunate: Ritual and Material Symbolism in the Literary Construction of Warrior Order（将軍の正当性：「平家物語」における儀礼文化と物質文化の象徴性）、2013、200
⑧松尾葦江編、非売品、「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第２集、2012、140

⑨伊藤慎吾、三弥井書店、室町戦国期の公家社会と文事、2012、458
⑩石川透、三弥井書店、保元・平治物語絵巻をよむ、2012、114
⑪松尾葦江編、非売品、「文化現象としての源平盛衰記」研究―文芸・絵画・言語・歴史を総合して―第１集、2011、172
⑫石川透、思文閣出版、入門奈良絵本・絵巻、2010、124
⑬伊藤慎吾、三弥井書店、室町戦国期の文芸とその展開、2010、408

６．研究組織

(1)研究代表者

松尾　葦江（MATSUO,　Ashie）
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：７０１５７２５４

(2)連携研究者

石川　透（ISHIKAWA,　Toru）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：３０２１１７２５

小林　健二（KOBAYASHI,　Kenji）
国文学研究資料館・教授
研究者番号：７０１４１９９２

伊海　孝充（IKAI,　Takamitsu）
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：３０４０９３５４

小助川　元太（KOSUKEGAWA,　Ganta）
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：３０３５３３１１

岩城　賢太郎（IWAGI,　Kentaro）
武蔵野大学・文学部・准教授
研究者番号：４０４４２５１１

坂井　孝一（SAKAI,　Kouichi）
創価大学・文学部・教授
研究者番号：４０２３５１０６

高橋　典幸（TAKAHASHI,　Noriyuki）
東京大学大学院・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：１０２９２７９９

吉田　永弘（YOSHIDA,　Nagahiro）
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：３０３６３９０６

原田　敦史（HARADA,　Atsushi）
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号：９０５８４６５７

(3)研究協力者

辻本　恭子（TSUJIMOTO,　Kyoko）
兵庫大学・非常勤講師
甲南大学・非常勤講師

平藤　幸（HIRAFUJI,　Sachi）
鶴見大学・非常勤講師
研究者番号：５０５３５１１９

伊藤　慎吾（ITO,　Shingo）
國學院大學・非常勤講師
研究者番号：２０５９８１８０

山本　岳史（YAMAMOTO,　Takeshi）
國學院大學・研究開発推進機構・ポスドク研究員

秋田　陽哉（AKITA, Youya）
滝高等学校・教諭

Vyjayanthi　Selinger
Bowdoin college・Associate Professor